

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合で、一部表記を改めた箇所があります。）

【1】あの先生は「徳がある」から、みなに尊敬される。不始末を起こした会社の社長が「私の不徳のいたすところです」と言って **A シャザイ** する。このようなことを眼にしたことがあるだろう。ここで言われる「徳」は明らかに人間に特有のものである。イヌやネコに「徳がある」とか「不徳のいたすところだ」とか言うのは、非常に奇妙であろう。

【2】では、この人間に特有の「徳」とはどのようなものであろうか。それを明らかにするために、古代ギリシアの哲学者アリストテレスが定義した「徳」の意味に着目することしよう。

【3】アリストテレスによれば、徳とは「卓越した性格」を意味する。私たちはさまざまな性格をもつ。親切、意地悪、鷹揚^{おうよう}、短気、勤勉、**B 怠情**、好奇心、無関心など、数えあげればきりがない。このような性格の集まりがそれぞれの人の「人柄」や「人物像」を構成する。徳はさまざまな性格のうち、とくにすぐれたもの（卓越した性格）を意味する。ただし、「悪徳」と言うこともあるように、徳には悪い性格を含めることもある。その場合は、善い性格のほうは「**X 徳**」とよぶ。話が**。フクザツ**になるので、ここでは、たんに「徳」と言えば、**X 徳**を意味することとする。

【4】徳は大きく「倫理的徳」と「知的徳」に分けられる。まずは前者から見ていこう。倫理的徳は、その名のとおり、倫理的な実践（倫理的な判断や行為）に関わる徳である。具体的には、正義、勇氣、節制、慈愛など、さまざまなものがある。私たちは日々、なされた行為について、それを善いとか、悪いとか判断している。また、善いことをして、悪いことをしないようにしている。このような倫理的な判断や行為において中心的な役割を果たすのが倫理的徳である。

【5】たとえば、正義の徳は、ある行為が不正でないかどうか、公平性を欠いていないかどうかを正しく判断することを可能にする。加えて、公正で公平な行為を実行し、そうでない行為を抑制することも可能にする。正義の徳を備えた人は、まさにその徳によって、**①**このような倫理的な判断や行為を正しく行うことができるのである。

【6】倫理的徳を倫理実践の中心に据えて倫理を理解しようとする立場を「徳倫理学」とよぶ。徳倫理学では、倫理的に善い行為とは、倫理的徳にもとづいて行われる行為のことである。徳がなければ、善い行為もありえない。したがって、たまたま公正なことを行っても、それが正義の徳によるものでなければ、善い行為にはならない。困っている人をたまたま助けても、慈愛の徳にもとづいて助けるのでなければ、善い行為にはならないのである。逆に、たまたま不正をしても、倫理的な徳をもつ人がたまたま何らかの事情でそうしたのであれば、悪い行為にはならない。

【7】このように、徳倫理学では、行為の倫理的な善悪は倫理的な徳によって決まる。これが徳倫理学の大きな特徴のひとつである。たまたま公正なことや不正なことをしても、善い行為や悪い行為にはならない。この点にかなり**。イワカン**を覚える人もいるだろう。じつさい、倫理学の**②**別の立場では、行為の善悪をそのようには捉えない。

【8】倫理学には、徳倫理学のほかに、義務論と功利主義というふたつの主要な立場がある。義務論は、行為が人間としての義務（誠実であることや人を傷つけないことなど、人間としてなすべきこと）にもとづいているかどうかで、行為の善悪が決まるとする。一方、功利主義は、行為の結果が善いかどうかで、行為の善悪が決まるとする。このように、倫理的な立場によって、行為の善悪の捉え方はかなり異なる。それでも、私たちの日常の感覚から言って、倫理的な徳が私たちの倫理的な実践において重要な役割を果たしていることは間違いないだろう。

【9】つぎに「知的徳」を見ていこう。倫理的徳が倫理実践に関わる徳であるのにたいして、知的徳は知識の獲得に関わる徳である。私たち人間の活動はそのほとんどが知識にもとづいて行われると言ってよいくらい、知識が重要な役割を果たしている。図書館に行くにも、ふつう図書館がどこにあるかを知っていなければならないし、自転車に乗るにも、自転車の乗り方を知っていなければならない。このような知識の獲得を可能にするのが、知的徳（知的に卓越した性格）である。知的徳を備えた人は、その徳によって、さまざまな知識を獲得することができる。

【10】知的徳も、具体的には、開かれた心、知的勇氣、好奇心、**③**粘り強さなど、たくさんある。たとえば、開かれた心は、自分と反対の人の意見にもよく耳を傾け、自分の考えが本当に正しいのかどうかを多角的に検討するような性格のことであり、それによって正しい考え（すなわち知識）に至ることが可能になる。このような開かれた心をもたなければ、他者の考えを無視して、自分だけの独善的な考えに**E 陥り**やすくなる。

11 また、粘り強さも重要である。それはどんな困難にも負けずに辛抱強く探究を続けていく知的徳である。科学では、何度も実験に失敗して、ようやく成功に至ることが多い。度重なる失敗にもくじけずに、何十回、何百回と実験を続けていくには、粘り強さが不可欠である。科学的な知識は粘り強さという知的徳の賜物と言えよう。

12 このように、徳には、倫理的な実践に関わる倫理的徳と、知識の獲得に関わる知的徳がある。

13 倫理的徳と知的徳のいずれにせよ、徳は卓越した性格のことである。では、性格が「卓越している」というのは、いったいどのようなことを指すのであろうか。そのヒントは何事も「Y」がよいということにある。

14 たとえば、カメラマンが危険な戦争地帯で悲惨な状況を伝えるために写真を撮ろうとすると、銃弾やミサイルに当たって命を落とす危険に立ち向かっていかなければならない。a、そのような「勇氣」をもたなければならぬ。b、銃弾が激

しく飛び交うなかに突入していたり、ミサイルが落ちそうな場所に一目散に駆けつけたりしては、ほぼ間違いなく命を落とすことになる。このような無謀な行いをするのは、勇氣ではなく、「蛮勇」であろう。逆に、銃撃戦がおさまったり、ミサイルが落下し終えたりしたあとに、恐ろしくて現場に駆けつけることができないとすれば、それは「臆病」であろう。

15 勇氣は危険を正しく恐れることにある。状況がどれくらい危険か、その危険の程度に応じて、適度な強さの恐怖を抱き、その恐怖にもとづいて適切に行動するのが、勇氣である。蛮勇は危険にたいする恐怖が弱すぎるため、ほぼ確実に死をもたらすような無謀な行動に走らせる。また、臆病は危険にたいする恐怖が強すぎて、惨状を伝える写真を撮れなくさせる。

16 勇氣は弱すぎもせず、強すぎもせず、適度な強さの恐怖を基盤として成立する。そのような恐怖によって、状況の危険性を正しく捉え、それにもとづいて正しい行動を行うことが可能となる。このような勇氣は卓越した性格の代表的なものであり、倫理的徳としても、知的徳（「知的勇氣」）としても挙げられる。

17 卓越した性格である徳は、一般に、弱すぎず、強すぎず、その中間の適度な強さの情動を中核として成り立つものである。それゆえ、「中庸の徳」とよばれたりする。

18 c、正義は不正への適度な怒りという情動を中核とし、節制は事物への適度な欲望という情動を中核とする。不正への怒りが弱すぎると、大きな不正を簡単に赦してしまったり、逆に強すぎると、小さな不正に大きな罰を与えてしまったりする。

d、事物への欲望が弱すぎると、たとえば、食欲不振のようにあまり食べられなくなったり、逆に強すぎると、暴飲暴食に走ったりする。

19 ただし、適度な情動を抱いても、それにもとづく行動がつねに成功するとはかぎらない。必ず不確実な要因がある以上、失敗する可能性がつねに残るからだ。さきの例で言えば、戦争地帯で適度な恐怖を抱いて、細心の注意を払いながら、惨劇の現場を撮影しようとしても、たまたま飛んできた銃弾に不運にも倒れるということは起こりうる。徳のある人といえども、つねにうまくいくとはかぎらないのである。

（信原幸弘『「覚える」と「わかる」——知の仕組みとその可能性』より）

問一 — A、Eについて、漢字は読み方をひらがなで答え、カタカナは漢字に直し、楷書で書きなさい。

問二 Xには漢字一字が入ります。その漢字を含む二字熟語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 修行 イ 美観 ウ 道理 エ 良好

問三 — ①「このような倫理的な判断や行為を正しく行うこと」とは、具体的にどうすることですか。本文中の語を用いて、五十字以内で答えなさい。

問四 — ②「別の立場では、行為の善悪をそのようには捉えない」とありますが、別の立場ではどのように捉えると述べていますか。二つ答えなさい。

問五 ―― ③「粘り強さ」とありますが、粘り強さが知的徳である理由を説明した左記の文の I ・ II に入る適切な言葉を本文中より制限字数内で抜き出して答えなさい。

知的徳とは I (十字以内) であるが、科学的な知識を得るためには、II (二十五字以内) 粘り強さが不可欠だから。

問六 Y に入る語を文中より漢字二字で抜き出して答えなさい。

問七 a d に入る語として最も適切な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア また イ たとえば ウ しかし エ しかも オ つまり

問八 形式段落 1 19 を四つの意味段落に分けるとすると、第二、第三段落はどの形式段落からになりますか。
段落番号を算用数字で答えなさい。

問九 次のア～オのうち、筆者が述べている内容として正しいものには○、間違っているものには×で答えなさい。

- ア 倫理学にはさまざまな立場による考え方があがるが、共通して言えることは、人間特有の「徳」の基盤として、より良い人間はどうあるべきかを追究する学問であるということだ。
- イ 倫理的徳とは、実践の中で倫理を理解しようという立場であり、行為の過程は考慮せずに、その行為の結果として善いか悪いかを正しく判断することが重要である。
- ウ 行為の善悪は倫理的徳の有無に基づいて決まり、倫理的徳のある人が不正をしたとしてもまたまの事情によるものであれば悪とは見なさないと徳倫理学では考えられる。
- エ 知的徳とは、生きるために必要な知識の獲得に伴う徳であり、他者との関係の中でいろいろな角度から自分の意見を見つめ直すので、倫理的徳よりも理解しやすい。
- オ 勇気とは、倫理的徳と知的徳に大別される徳の代表的なものであり、危険への適切な恐れがあることにより、その危険性を正しく理解しながら行動できるのである。

二 次の文章は高校三年生で音楽ライターを目指す「私」が友人の辻本君と話をした後、保健室にいる従妹の志摩ちゃんに会いに行く場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合で、一部表記を改めた箇所があります。)

私は音楽少女。雑誌の発売日にはチャリを飛ばし、CDは買ったその場でポータブルプレイヤーにセットして聴く。ラジオも毎週聴いて録音し、気に入った曲はダビング。お年玉で志摩ちゃんと一緒にライブに行く。私の耳元では、いつだって最高にかっこいい音が鳴ってるんだ。それこそが、私の全て。

……だった。昨日まで。

①世界が変わる。全てだと思っていたものが、全てではなくなる。少しの恐れはあつて、でも前に進みたいという気持ちが圧倒的に勝る。新しい海を見つけた冒険者というのは、こういう気持ちに違いない。

私は、思考のすきまを音楽のためでなく、辻本くんのために割くようになっていた。帰り道に自転車を漕ぎながら食事の後皿洗いをしながらお風呂につかりながら、考えているのは辻本くんのことだった。明日何を話そうとか、バンドでどんな曲を演奏するのだろうか。いくら考えても飽きない。終点のないジェットコースターみたいだ。

実際、私と辻本くんとの距離は、一気に縮まっていた。掃除当番の週が終わっても、私たちはよく話した。昼休みの廊下で、教室で。雑誌を広げて一緒に読んだりもした。

辻本くんが作った曲も聴かせてもらった。二人で廊下で話していたとき、見知らぬ背の高い男子が辻本くんに声をかけてきて、それがバンドのメンバーだったのだ。辻本くんは私のことを「同じクラスの、白田さん」、その男子のことを「C組でギターの、林」と簡単に紹介した。林くんは「へえ。辻本に女友達なんていたんだ」と言って、私のことをちよつとの間じつと見た。林くんはにこりともしなかったけれど、こう言った。

「**a**」

私は、忠犬のごとくワンと言わん勢いで首を縦に振ったが、隣で辻本くんの当惑した声がした。

「**b**」

「吉井？あいつまた保健室で寝てたよ。大丈夫だって。じゃなかったら俺だってこんなこと言わないよ。藤山もうるさそうだけど、どうせ来ないしさあ」

二人は私にはわからない会話を少しして、その後で結局部室に誘って曲を聴かせてくれた。辻本くんのベースと、林くんのギターだけで、唄もドラムもなかったけれど、意外に※メロウな主旋律が想像できた。

「**c**」

と訊くと、二人は顔を見合わせて苦笑いをした。

「F組の藤山がボーカルで、そいつにまかせてんの。まだできてねんだよ」

辻本くんが説明する。隣のクラスの藤山といえば、目立つので私も知っている。長髪に甘めの顔だけど、何とはなしに根性が悪そう。けど軽音部だとは知らなかった。

「**d**」

林くんが意地悪く笑って言った。辻本くんはため息まじりに「**e**」とこぼす。

私は思わず、「え、藤山って人より二人のほうが全然**Aカッコウ**良いよ！」と叫んでしまった。辻本くんはぼかんとし、林くんは神妙な顔をした。

「……見かけより良い人だね、白田さん。ただの、デカくて怖い人だと思ってたけど」

「し、失礼だろ、林く！」

林くんの言葉に、辻本くんがやたらに慌てるので、私は笑ってしまう。「仲が良いんだな、この二人」^①と思い、この空間に入れてもらえたことがよけいに嬉しくなった。

部室は狭くて、音響も悪くて埃のにおいがこもっていた。けど、いつもここに居られる人がうらやましい気がする。私ももう少しここに居たくて、二人に「もう一回聴かせて」と演奏を頼んだ。林くんが、無表情ながらも「よっしゃ」と**B快く**返事をしてくれた。辻本くんも、照れくさそうに唇を噛みながらうなずく。

二人の演奏は、まだ穴ぼこだらけのパズルのようで、完成形にはほど遠い。でも、完成したときのかたちは素晴らしいんだろうと思わされた。学祭のステージでは、それが見られるはずだ。

学祭まで、あと二週間。

何だかその日は志摩ちゃんと話したくなって、放課後、私は保健室に行ってみた。居なかったらちよつとがっかりだな、と思っただけれど、志摩ちゃんとはちゃんと居てくれた。よく保健室で見かける女子二人と、三人で机を囲んでいた。志摩ちゃんの隣の椅子には、肩の上で髪を切りそろえたふつくらした頬の二年生、向かいには三年の理系クラスの子——パーマの長い髪以外は印象の弱い人——が腰掛けている。

私に気が付くと、志摩ちゃんは「先輩！」と^③珍しくハイテンションに手を振った。他の二人も、何だか妙ににこにこしている。

「え、何。何かあったの？」

私が机にかばんを置くと、奥のデスクのほうから先生が出てきて言った。先生まで、**Cギゲン**良さそうにコーヒーをすすっている。

「志摩さんの書いた文が、雑誌に載ったのよー」

えっ、と声を上げてしまう。雑誌に文章、ですぐに思い当たったのは、音楽誌のレビューだった。お便りなどではなく、あくまでも原稿用紙にしっかりと書かれたレビューを**Dボシユウ**する雑誌がいくつかある。ライターを志す人なら、ぼんやりとでも「載ってみたい」と思うことがあるだろう、ちよつとした舞台だ。

がばつと身を乗り出して、志摩ちゃんの前に広げられた雑誌を見ると、ビンゴ。私がいつも買ってる雑誌とは別だけど、同じような読者レビューのコーナーだった。

『目指す永遠なんてどこにもない、けど——スズムシズのゆく先——大住志摩』おおすみ

志摩ちゃんの名前が、活字になって雑誌に載っている。こんな田舎でも手に入るようなメジャーな雑誌に。

いきなり雑誌の上に頭を伏せて、言葉を失った私に、志摩ちゃん以外の二人がヒいているのが明らかに伝わってきた。気まずさを隠すため、私は何とか台詞を探す。

「す、ごいじゃん、こんな雑誌に。普通、大学生とかが載ってるよね、高校生でこんなさ」

活字に目を泳がせたまま私が言うと、三年生のほうが「え、そうなんだ」と声を上げた。二年生の子が志摩ちゃんの手をつかむのが、視界の端に見えた。

「うそ。すっごいね、志摩！やっぱ才能あるよお」

才能。二年生の彼女の、底抜けに嬉しそうな声でつむがれたその言葉に、^④私の心を覆うものが引き剥がされる気がした。さっきまで私を覆っていた、温かい幸福感、ふわふわとした高揚、そういうものがメリツと不自然な音を立てて剥がれたのだ。

文章を読もうとしても、頭に入ってこない。機械的に目で追うことしかできない。

頭を起こすと、志摩ちゃんの控えめな笑顔があった。私はそこに、遠慮の意を感じ取ってしまう。私に対しての遠慮だ。

頬が、燃え上がるように熱くなった。私はほとんど反射のように立ち上がり、志摩ちゃんとみんなに背中を向けてしまう。

「^⑤今週、掃除当番だった！ごめん！」

何と不自然な、と自分でも思っただけで、どうしようもなかった。私は自分のかばんをひつつかで保健室を飛び出していた。背中にいくらかの困惑の視線を感じた。

自転車漕いで坂道を飛ばした。鳥になった気はしなかった。ただただ、地面を必死で走っているのだと思えず、^⑥自分のちっぽけさにぐんぐん胸をつぶされた。坂の下の本屋には、志摩ちゃんの買う音楽誌が平積みになっていた。私は一番上のをむしりとしてレジに出し、お金を払ってまた自転車に飛び乗った。

家よりもっと遠くに行きたくて、バイパスの高架下の小さな公園で、雑誌を開いた。新鮮なインクにおいて、でも私が買う雑誌のものは少し違うにおいがする。何のバンド名も目に留まらない。志摩ちゃんの名前は、すぐに見つけ出せた。

私はそのレビューを、ゆっくり読んだ。ゆっくり読んでも、心臓は落ち着かなかった。どこかしたまま、繰り返して読んだ。

志摩ちゃんの書いた文章を、私は初めて読んだ。だからよけいに、自分の身近にいる人が書いたものとは信じられなかった。志摩ちゃんのレビューは上手かった。単に小手先だけで上手いんじゃないかと、考えの深さや、重さなど、そういうものがダイレクトに伝わってくる文章だった。

私は志摩ちゃんのレビューを読み終えると、自転車のカゴに雑誌を放って、来た道に戻った。家に着いて、机に向かい、原稿用紙を広げた。でも何も書けなかった。何について書けば良いのかさえわからなかった。だいたいこの二週間ばかり、ちゃんと音楽を聴いていなかった気がする。ラジオで流れる曲も何となく素通りしていったし、むろん文章を書くことだってしなかった。

本棚から、クリアファイルの一つ取り出す。今まで自分で書いたレビューや、ライブの感想なんかが入っているファイルだ。改めて目を通したら、^⑦志摩ちゃんの記事とはくらべものにならないほど無様で、わかりづらくて、泣きたくなった。

※ メロウ…音が柔らかく、豊かなさま。

（豊島ミホ『檸檬のころ』より）

問一 —— **A** **→** **E** について、漢字は読み方をひらがなで答え、カタカナは漢字に直し、楷書で書きなさい。

問二 —— ① 「世界が変わる」とありますが、具体的にどのように変わりましたか。説明しなさい。

問三 — a e に入る会話として最も適切なものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 顔だけは良いからなあ、藤山
 イ どんな歌詞がつくの？
 ウ 全然練習来ないけど、まああいつの役は客集めだから
 エ 部室に演奏聴きに来たら？
 オ え、でも、あいつが何て言うか

問四 — ② 「この空間に入れてもらえたことがよけいに嬉しくなった」とありますが、この時の心情として最も適切なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 友人の少ない「私」を部室に誘ってくれただけでなく、楽しい会話で「私」をなごませようとしてくれる二人の優しさを嬉しく感じている。
 イ 「私」にほめられて照れ隠しにふざけ合っているという、意外にも可愛らしい辻本くん的一面を見ることができ、嬉しく感じている。
 ウ 自分だけに歌詞がつく前の未完成の曲を聴かせてもらうことができ、自分の音楽センスを認めてもらったような気がして嬉しく感じている。
 エ 心を許しあう二人が一緒にいるところに誘ってもらい、辻本くんが「私」にも心を許してもらえたような気がして、嬉しく感じている。
 オ 他のメンバーは部室に部外者を誘いたくない様子なのに、自分のために無理をして部室に誘ってくれたことを嬉しく感じている。

問五 — ③ 「珍しくハイテンションに手を振った」とありますが、志摩ちゃんが「私」に対してそのような態度をとった際の心情を解答欄の「〜」と書いている」に続くように答えなさい。

問六 — ④ 「私の心を覆うもの」とは具体的にどのようなものですか。二十字以内で答えなさい。

問七 — ⑤ 「今週、掃除当番だった！ごめん！」とありますが、「私」のこの時の心情として最も適切なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「私」の文章こそが雑誌に載ると思っていたのに、志摩ちゃんのレビューが雑誌に載ったことでプライドが傷つけられ、その場から離れたいと思っている。
 イ 音楽ライターを目指す「私」は、レビューが雑誌に載った志摩ちゃんの控えめな笑顔に気づいてみじめに感じ、その場から離れたいと思っている。
 ウ 志摩ちゃんが「私」への遠慮から、レビューが雑誌に載ったことを自分自身の口で教えてくれなかったことに傷つき、その場から離れたいと思っている。
 エ 「私」は普段、掃除当番をサボることなどないのに、思っていたより長い時間、保健室にいたことに焦り、その場から離れたいと思っている。
 オ 志摩ちゃんのレビューが雑誌に載ったことを知っている「みんな」の無遠慮な明るさに怒りを感じ、不愉快なのでその場から離れたいと思っている。

問八 — ⑥ 「自分のちっぽけさ」とありますが、どのようなところが「ちっぽけ」なのですか。説明しなさい。

問九 — ⑦ 「志摩ちゃんの文章」を「私」はどのように評価していますか。文章の言葉を用いて四十字以内で答えなさい。